

令和2年度第1回定時社員総会



定時社員総会の様子  
和田会長あいさつ

6月20日、中央シルバーエリア視聴覚室にて、令和2年度秋田県社会福祉士会定時社員総会が開催されました。議案・報告事項は次の通りです。

○議案

第一号議案 令和元年度 決算報告について  
第二号議案 役員(理事 監事)の選任について

○報告事項

第一号報告 令和元年度 事業報告について

○理事会報告

- (1) 会長及び副会長の選任について
- (2) 委員会委員の選任について
- (3) 事務局の事務局長及び所要職員の設置について

議案については、第一号、第二号とも承認されました。

新役員も加わり、各委員会もメンバーが入れ替わりました。なお、今回は新型コロナウイルス感染症予防の為、参加者は少数となりましたが、全員で自己紹介をし閉会としました。

【役員】

- 代表理事 和田 士郎 (会長)
- 理事 鈴木 卓 (副会長)
- 理事 柴田 聡 (副会長)
- 理事 佐藤 俊一
- 理事 豊澤 公榮
- 理事 羽川 毅郎

<発行>  
一般社団法人  
秋田県社会福祉士会  
<発行責任者> 和田 士郎  
<事務局>  
秋田市旭北栄町1-5  
(秋田県社会福祉会館内)  
<TEL>  
018-896-7881  
<FAX>  
018-896-7882  
<MAIL>  
akitaken-csw@flute.ocn.ne.jp  
<URL>  
<http://www.akita-csw.org/>  
編集 広報委員会

新役員紹介



大淵裕子氏



工藤摂子氏



山田克宏氏

【事務局】

- 事務局長 佐藤 俊一
- 事務局次長 大淵 裕子
- 事務局員 羽川 美貴子
- 理事 伊藤 政利
- 理事 工藤 摂子
- 理事 山田 克宏
- 監事 佐々木 尚敏
- 監事 佐藤 一弘

- ・令和2年度 第1回定時社員総会
- ・職場紹介
- ・広報委員会 オンラインミーティング
- ・介護支援専門員 受験対策講座
- ・ペンリレー

## 職場紹介

### 「」の道65年」



社会福祉法人東北報公会  
児童養護施設陽清学園  
主任児童指導員  
村上賢一

児童養護施設は秋田県に4か所、全国で605か所あり、さまざまな理由で保護者と暮らすことができない子どもたちを家庭に代わって養育しています。児童養護施設の役割は震災孤児を収容保護したことに端を発します。高度経済成長期以降は家庭内暴力など子ども家庭問題による入所受け入れが増加、現代は皆さんもご存じのように虐待やDVを受けた子どもが多くなっております。子どもの抱える課題がより重篤化しています。そのため、衣食住の提供に止まらず、子どもの心身の回復を目指したより専門的支援の充実が求められています。「子どもの最善の利益とは」を念頭に、子どもが安全で安心な生活ができる場の提供、他者（大人）を頼りながら自立した生活を送ることができるよう、土台作りともいえる支援を日々行っています。

さて、私たち陽清学園については1955年に創立、今年で65年目となりました。10年目に保育所を開設、その後支援する中で、多様化するニーズに対応するため、障害児・者施設、グループホームなどを設立し現在に至ります。

今年には新型コロナウイルス感染症拡大の影響で休校が続いた結果、子ども達と職員がいる時間が多くなりました。学校からは宿題が多く出され、子どもも職員も悪戦苦闘しながら取り組んだり（夏休み、冬休みの宿題を思い出していました）、自由に外出することもできなく、子どもたちのストレス解消もままならない日もありましたが、子どもと職員がゆつくりと向き合うことができた日々でもありました。創設者が残した「利用者の言葉に出せない真実を聞き分け、障害を持つている人でも幼児でも未来の世代を支えていく人間として接することを忘れないで欲しい」「支援とは子どもたちが持つ夢を見守り、その夢を育てていくことです」というこれらの言葉を胸に、安心できる生活をこれからも提供していきます。

### 「コロナ禍における困窮者支援」



湯沢市社会福祉協議会  
事務局次長  
赤平一夫

生活困窮者自立支援事業について、当湯沢市では法施行前のモデル事業に取り組んだことからまる七年を迎えるところです。この事業は、「仕事が見つからない」「社会に出るのが不安」「家賃が払えずアパートを追い出される」など、様々な困難の中で生活に困窮している方に包括的な支援を行う制度です。

昨今、緊急小口等の生活福祉資金貸付相談が激増し、全国で例年の8割増の状況からもわかるように、コロナ禍によって数多くの人々の生計が危機に瀕し続けている現状にあります。コ

ロナ禍が原因の収入減の場合、融資することでこの状況を打破できる可能性のある方には生活の立て直しに向け、無利子緊急小口資金が三ヶ月の貸付を前提にした相談を受けております。しかし、サラ金やカードローン等多額の借金がある場合は、借入の目的が借金返済に回される恐れがあるため、弁護士等と連携し債務整理を含めた家計再建を提案します。このように相談の内容によっては支援の方向性の棲み分けが必要です。また、病気やケガ、借金により困窮に追い込まれる方もおりますが、知的障がいや発達障がいの疑いが要因となっているケースが多いのも特徴です。経歴をみると職業を短期間に転々と代わっていたり、職場での人間関係を築けず孤立し、退職する方が相当数います。こうした方々には、軽作業を通して本人の能力を見極めて今後の支援を判断していくことが必要な場合もあります。生活に困っている方なので、軽作業も有償に出来るよう試行錯誤することもあります。今後は社協が作業を用意するだけではなく、企業と連携し依頼を受けれるよう進めていくことが必要です。こうして粘り強く本人と向き合うことで信頼関係を構築し、本人に寄り添って次のステージへと進んでいきます。

年間の相談者の内、困窮から脱し自立したケースは二割程ですが、弁護士等との連携で債務整理を進め、支援前との比較で変化が表れたケースは※90%を超えています。支援により、税金滞納を解消するケースも多く行政にもメリットがあることをもつと多くの方々にも理解いただき、この制度に繋がりを「生きる希望」が見いだせる方が増えることを期待しています。※令和元年度の生活困窮者自立支援事業実績報告より

## 広報委員会 オンラインミーティング

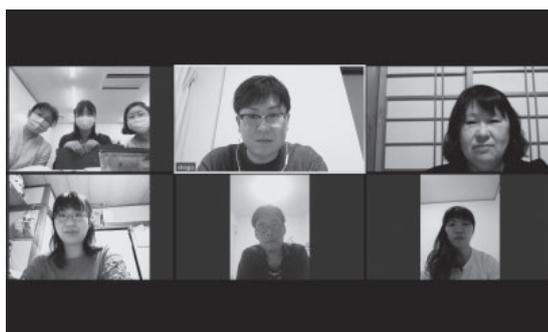
新型コロナウイルス感染症拡大の影響で広報委員会では、6月21日、オンライン会議を行いました。その時の参加者の感想を紹介します。

便利だった事は、「移動時間が省けた」「遠方からの参加者もオンラインで参加できるので日程調整がスムーズにいった」などでした。大変だった事は、「Wi-Fiの状況に左右される」「全員の顔が一気に映らないので誰が発言しているのか確認するのが大変だった」「操作できるか不安だった」などでした。

職場での活用の有無については、8名中5名は「職場での利用は特段考えていない」という事でしたが、「研修や家族との面談に使えば」という声もありました。3名はすでに「家族や利用者との面談に用いている」ということでした。遠方からの参加が可能という長所はありますが、まだまだインフラ状況に左右されたり、操作への不安・不慣れ、相手側に機器がない等の問題も浮き彫りとなっていました。私の感想としては、「参加者のうなずきのしぐさ等が確認しづらいため、一人ひとりに意見を確認しながら会議を進行していくので時間がかかった」「相手の表情や場の空気が読み取りづらいため話がされる事が少なく、議題に沿って淡々と議論が進んだ」という印象でした。福祉の現場でもICTの活用が叫ばれて久しく、今回の体験を参考に長所・短所

も踏まえて活用方法を考えていけたらと思います。

(記：伊藤誠吾)



オンラインミーティングの様子

## 令和2年度 介護支援専門員受験対策講座

人材育成委員会 佐藤 優貴子

7月11、12、18日の3日間を通して、令和2年度介護支援専門員受験対策講座を行いました。毎年人材育成委員会が主体となって開催しており、50名前後の申し込みがあります。

講師は当会の会員で、今までの出題傾向や制度改正のポイントなどを、現役ケアマネならではの事例を交えてわかりやすく解説してくれています(たまに冗談を交えて笑いを取っ

たり取れなかったり)。テキストは講師手作り、試験当日まで活用できるよう、しっかりと要点がまとめられています。講座終了後は、受講生から個別に質問が挙がり、時間いっぱいまで丁寧に質問に対応します。

講座は3日間という長丁場ですが、受講生の皆さんはとても真剣なまなざしで話を聞いていました。今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響も考慮して、密にならないよう十分に間を取って席を配置しました。それによって講師との距離が遠くなってしまうましたが、3日間で席順を変えながら、受講番号が後ろの人も前の席で講座が受けられるよう工夫しました。受講生の熱い思いが、講師含め私たちスタッフにもひしひしと伝わり、受講生の皆さんが有意義な講座だったと思ってもらえるよう、そして、今年も一人でも多くの方が試験に合格するよう、私たちも一生懸命サポートをしていこうと思えました。



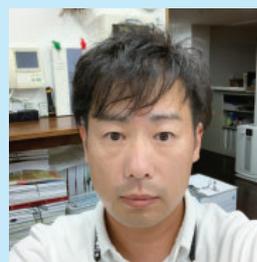
受験対策講座の様子

## ペンリレー

### 「ウィズコロナ・アフターコロナの世界で今何を問われているのか」

社会福祉法人北杜 特養中通・特養中通アネックス

施設長 佐々木 将樹



盟友二見健さんよりバトンを受けました。

みなさま、新型コロナウイルス感染症への対応をしながらの業務大変ご苦勞様です。行動の見直しが求められ、不便な面と、逆に便利になった面もあったのではないのでしょうか。個人的には、多くのセミナーがZoom対応となり、移動が減って楽になりましたが、いつでも見られるという環境はなかなか酷だと思っています。なかなか視聴しません。

ビフォーアフターコロナの社会では、地域包括ケア、地域共生社会の推進と福祉ニーズの多様化、様々なつながりの創造等の必要性が叫ばれていたように思います。新型コロナウイルスの流行して以降の社会では、休業や失業による生活困窮、巣ごもり中の虐待の増加、サービス事業所の休止等の様々な社会問題が出てきており、社会的ニーズを持つ対象者は増大し深刻化しているようです。人が集い繋がりながら互いに助け合う社会を目指していましたが、今はいかに直接会わずにつながることができるかの工夫が必要と感じます。失業者と自殺者の数は相関関係にあり、今後経済の回復が遅れば問題はさらに大きくなるのではないのでしょうか。

我々は新型コロナウイルスに何を問われているのか。

「もっと人を信頼しろ」と言われているような気がしています。

新型コロナウイルスの流行はグローバル化によるものと言われています。14世紀のペスト大流行では、世界人口の22%にあたる1億人が死亡したと推計されています。移動がカジュアルになった現代でありながらかつての感染症ほど大流行にならない背景には、医療の発展とにより情報の共有にあると思います。テクノロジーの進歩がより早く、より広範囲な情報共有を可能とし、人々の行動を早め、結果的に大流行を抑えた側面がありそうです。

かつて誰も助けてはくれない、人を信じていないがために車や家を所有して自己完結を目指していた時代から、現代は車や家、情報を共有する時代に入っていると思います。家族、社員を養うことはしても、ほかの人は守らないといったかつての社会から、「助かりたければ分断せず、もっとつながり、もっと信頼しろ」と言われているようです。感染症の影響の出ない適切な距離を保ちながら以前よりも密接につながり、信頼し合い、共有し、互いの福祉ニーズを解決しあう社会が求められているのではないのでしょうか。家族や会社単位で分断しないで、もっと大きくつながる必要があると感じています。

次は、日頃よりお世話になっている、ケアプランセンターひばり管理者佐藤舞子さんにバトンを渡します。

## 編集後記

全国的に行事やイベントの中止・延期が相次いであります。秋田県社会福祉士会においても、各研修の中止や活動の自粛があり、このような状況から、「今回の広報誌を発行すべきかどうか」という議論もなされました。

広報委員会メンバーからは、「このようなご時世だからこそ、皆さんがほっとできるような広報誌を作りたい」「自粛続きで会員同士の交流が減っており、会員の頑張っている様子を届けたい」との意見が多く、ページ数を減らす形で発行することとなりました。

今後も会報「かせ」を通し、会員皆様が頑張らされている姿をお伝えしていきたいと思えます。